

まち・ひと・はぐくむ



1. 歩いて知るまち

まちを歩いていると、「何だろう」というものに出会う。ロンドンではところどころで見かけるジグザグ型の交差点付近の車線（写真1）。



写真1

道路の車線は直線と思いこんでいるが、車線も1つのサインとみれば、目的に応じて一例えば交差点付近注意などデザインすればよいのである。また、階段のステップと車椅子用斜路が一体になった建物前のアプローチがある（写真2）。最近は日本でも小規模なものが見られるようになったが、7、8年前ロンドンで目にした時は大変興味をひかれた。ところがその後、いろいろな場所でこのタイプの階段があるので気づき、欧米ではかなり一般的なものであることがわかった。これはイエテボリに住む友人の



写真2

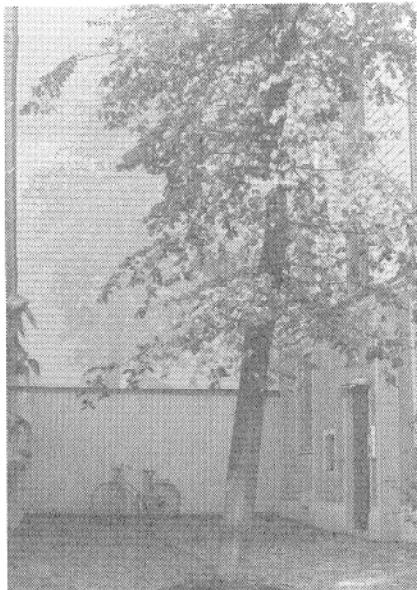


写真3

近所にある住宅の壁面である。集合住宅の中庭側の壁一面に「木の影」が描かれているのであった（写真3）。ちょうどその壁の前には1本の木が植えられており、見た目にはその木の影が壁に映っているとしか思えない。そのさり気ないアート感覚が楽しい。

まちを歩くことは、新しい建築やデザインされた環境を見ることだけが目的ではない。ごく



*Hisako KOURA
1957年7月13日生
大阪大学人間科学部人間科学科卒業
現在、大阪大学工学部建築工学科
第3講座、助手、地域計画・都市
デザイン
TEL 06-877-5111 (内線4973)

普通の生活環境に発見のあることがおもしろい。もともとまちは歩くスピードに合った空間として創られてきている。つまり、歩くスピードがまちの中のヒューマンスケールの要素が見えてくるのに調度よい速度であることがわかる。自分の足で歩いて、自分の目で見て、自分自身でまちを感じるところから、まちづくりは始まる。どれ程情報化が進んでも、知識が豊かになっても、それら雑誌やメディアを通して知るものはいずれもまちの断片でしかなく、切り取られた情景でしかない。

2. まちの感性

1つ1つのまちの要素を発見することやまちの課題を知ることは重要だが、そのためには、どれだけ多くのまちの感性を体験しているかということも大きく影響している。

真夏のフィレンツェのまちを半日歩く。昼食をとり、また歩く。3時頃になると本当に昼寝がしたくなる。陽ざしは強く、まちも静かだ。真夏にまちにいるのは観光客ぐらいであり、昼下がりには店も閉まり、人がいなくなる。フィレンツェのまちの中心地で、都市国家であったころの市壁の内側は、今も中世の都市の姿を残している。石づくりの建物に赤い屋根が続く。普通の家々には当然のことながら空調はない。真夏の昼さがりは、窓はあけて、木製のシェードを閉じ、風を通して、ゆっくり過す。レストランも陽がおちる午後7時にならないと再開しない。長い歴史の流れの中で、その土地の風土にあった住まい方を続けている。まちに暮す普通の人々が石づくりの家で、風土にあわせて暮

すことを選択している。というよりもそういう生活文化が根ざしているところで、あのフィレンツェの街なみが、中世都市の空間のおもかげが、今まで、またこれからもずっと残っていく。制度や法規制によるのではなく、そこに暮らす人々が共有している生活感、文化がまちの姿を維持する基本になっている。外から訪れた者から見ると、フィレンツェの中心は確かに、かつて花の都と呼ばれたように美しい。その美しさへの感性は、“美しさ”への思いというよりも、日常的なごくあたりまえのまちに対する感性として、普通に暮らす人々の間に共有化されている文化なのだろう。

このように都市に住む人々の共通の文化として残ってきた都市空間がある一方で、パリのように時代の意思、権力の意思が基礎をつくり、それが長い年月の中で都市の意志としてつくり続けられていったような都市空間もある。

ルーブル美術館のガラスのピラミッドからエトワールの凱旋門、新都心デファンスのグランアルシュに至る約7キロに及ぶ直線の道は、長い時間の流れの中で受け継がれた都市軸である。グランアルシュの計画は、この都市軸としての都市の意志を継承するものであった。そしてこれは、都市空間としてセーヌ川以東の旧市街地とは全く異質な新都心デファンスが、パリの新都心としてパリにつながるものとして意識しうるために必要なデザインだったといえる。10年ほど前に初めてデファンスを訪れた時は、広大な人工地盤上に高層ビルが並ぶ茫漠とした人工空間でしかなく、まちの気配も感じられなかつた。グランアルシュができて、その足もと

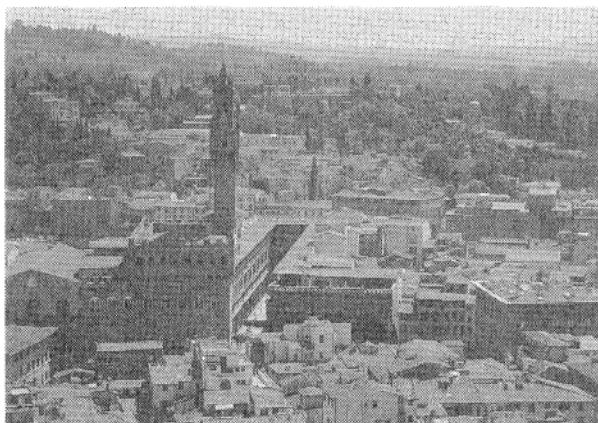


写真4 フィレンツェのまちなみ

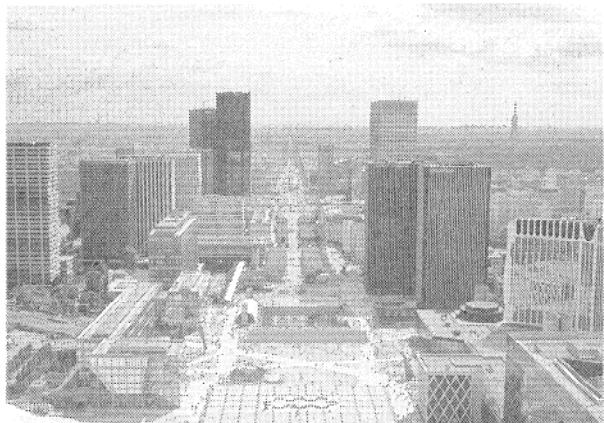


写真5 グランアルシュから凱旋門に続く都市軸

に立った時、遠くにエトワールの凱旋門が見え、まっすぐな軸が目に見えるようになった。この時、とらえどころのなかった人工空間が、まちとしての位置を得たように感じられた。まっすぐな道が見えるようになるためには、グランアルシェが必要であった。この計画をコンペで選択するというところに1つの意思がある。それは都市空間の構造として、パリのまち自身が持ち続けてきた意思の反映ともいえる。

これも1つのまちの感性である。フィレンツェのように人々の生活レベルで共有化できるものがまちのかたちになっているところもあれば、パリのように、まちのかたちに都市の意志をこめて創られたものが継承されることにより、人々に意識され、都市の文化として共有化されていくものもある。

日本の都市は、戦後の機能的、合理的都市整備の結果、戦前までは維持されていた近世からの伝統に基づく人々に共有化されていた都市生活の空間への共通の意識が、途絶えてしまっている。今、まちに対して共有化できる感性が見出せないまま、都市整備、都市更新が求められている。

3. まちを育む

大学に来てようやく2度目の新年である。それまで大阪の都市整備の一端にかかわってきた。建築は長くても5年の仕事であるが、まちづくりとなると10年を経て、ようやく少しかたちになってくるような仕事である。OBPは最初の計画案がだされたのが1969年であるから、既に25年を越えている。同じ年に再開発構想がだされた阿倍野再開発は、ようやく第1期地区の全貌が少し見えてきたようなところである。計画からまちが姿を見せるようになるまでつき合うとすると、一生に1つできれば幸いというものである。

OBPや阿部野のようなプロジェクト型のま

ちづくりは、ある程度、エリアも限定されるし、計画的に進めていくこともできる。一方、一般的な市街地の更新となると、少しづつ、言わば一戸づつの変化の積み重ねである。そこで、都市に意志がこめられておらず、また、人々が共通に共有化できるようなまちに対する感性が見失なわれている時に、長い時間の流れをどのようにつないで行けばいいのだろうか。社会が変化し、人々の生活要求も変化するなかで、何を依りどころとするのだろうか。

まちは時間の中で育まれるものであろう。1つ1つの建築はまちとの関係において生かされるものであろうし、そこで人が暮らし、その空間を人が使うことによって、まちの一部として意識される。そのためには、1つ1つの建築をつなぐものをどう創っていくか、どう計画していくかが重要になっている。これまでのよう風土や歴史に基づく生活文化を見失い、都市空間の構造として共有化できる意志が見出せない中で、時間の中を生きる都市空間を育んでいくためのデザインの考え方を求められている。建築とまち、まちとひとをつないでいくようなまちづくりの要素が必要である。1つ1つの建築物は、敷地の中に建てるのではなく、まちの中に建てると考えれば、中庭型のプライベートな空間以外の建物の外周の空間はまちの1部と意識できるだろう。そうなれば、個々の建築においても街なみや広場や歩行者の空間など、人々が共用するまちの部分としてのデザイン意識が必要になってくる。共有化できる感性が見失われている中では、まちの意志の確認作業や、人々が共有化できる文化の提案につながる作業を、デザインする側がまちづくりのプロセスの中で行っていく必要があるではないだろうか。いつの日か、再び、まちに暮らす人々に日常レベルで共有化される感性になるように、1つ1つのまちづくりのステップを積み重ねていくことだろう。